2011 年　9月号

滑稽俳句協会会長　八木　健氏　に聞く　35

緑偏「滑稽俳句集」を読み解く　27

(聞き手　高橋素子)

高橋 ＞　暦の上では秋とは言え、随分暑い日が続きます。
会長は、この暑さも、ものともせず、ネット上で素晴らしい企画を展開していらっしゃるとか。

会長 ＞　インターネットの通信講座で、「三六五日読むだけで俳人になれる講座」というのを発信しています。
お蔭さまで大好評です。

私はいくつもの活動をしていますが、その一つが「俳句の伝道師」です。私が知った俳句の素晴らしさを、一人でも多くの人に知って欲しいのです。「こんなイイモノ知らなきゃ損々」ですからね。

私は俳句を始めてから、自分に自信が持てるようになり、『怖いもの』がなくなりました。「自分には俳句がある」と思ったとき、「名誉・地位・財産」に無欲になりました。そんなものは俳句に比べたら「ツマランモノ」と思ったのです。

しかし、俳句は難しいものと、皆さん思い込んでいますから、俳句入門のハードルは高いのです。そこで「読むだけで俳人になれる」という、とんでもない講座を思いついたのです。ナレッジサーブという最大手の通信講座の事務局から、携帯やパソコンに毎日四〇〇文字の情報が三六五日、送信されます。

八木健の俳句人生を凝縮しました。だから、読み応えがあります。私も、この講座を発信することで勉強になっています。

高橋 ＞　会長御自身も、お勉強されているのですね。ご教授下さる内に、また新しい発見をなさるかも。
私もちょっと覗かせて戴きましたが、折にふれて会長ご自身が発見・創造された

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

「俳句の心」「俳句の作り方」その他諸々のコツ･知識を惜しげもなくご教授下さって、初心者の方だけでなく、ベテランの方にも充分納得･参考になる素敵な講座ですね。

会長 ＞　私はこの講座との出会いは、あなたにとって得がたいものであり、「**あなたの人生が劇的に変わる**」とお勧めしています。

高橋 ＞　本当に私もそう思います。その珠玉の講座をどう活かしてゆくか。あとは受講者自身の問題ですね。

それでは本日も、本題の「滑稽俳句集」を。前回に続いて「秋の植物」の部、季語は「薄」･「桔梗」です。万葉の昔、山上憶良は秋の七草を詠んで、

秋の野に咲きたる花を指（および）折り
かき數ふれば七草の花
萩の花尾花葛花撫子の花女郎花
また藤袴朝顔の花

と詠っていますが、ここで尾花は薄、朝顔は今の桔梗のことですね。

会長は薄と風の関係を滑稽に詠まれていますね。
薄かななびき返して風を追ふ　健

それでは、「紅緑の滑稽俳句集」の句、参ります。

花薄まねけば食ふ野馬かな　清流
小便を芒にすればとばしるよ　虚子
きりきりしゃんとして咲桔梗かな　一茶

ご解説よろしくお願い致します。

会長 ＞　「薄かななびき･･･」の句は、
擬人化の句です。風には強弱があって、風になびいた薄も風の弱くなった時にはモトに戻ります。その様子を「なびき返して」としたわけです。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

「花薄まねけば･･･」、
薄の穂を野馬が食べる。花薄が風に吹かれて招くようになる。だから、野馬が近づいて食べるのだということです。

「小便を芒に･･･」、
虚子にもこんな無邪気な句があったのですね。「ほとばしる」に、そのきらめきが活写されていますね。

「きりきりしゃん･･･」、
「きりきりしゃん」とは、「身ごしらえ･振る舞いなどにたるみや無駄がなく、見ていて気持ちのよいさま」と辞典にあります。人のことを表現する言葉ですが、この場合は桔梗を擬人化していますね。

高橋 ＞　有難うございます。次の季語は「茸」です。茸一つから様々な発想がありますね。
初茸や廻さば獨楽に廻るべく　抱一
伸過ぎて花咲きそうな茸かな　春鴻
盗なるかな茸狩りに来て芋を掘る　虚子
あの人はきのこのやうな耳にして　紅緑

会長 ＞　「初茸や廻さば･･･」、
茸は独楽に姿が似ています。独楽の様に廻るのではないかということです。

「伸過ぎて花･･･」、
伸びすぎて、花が咲きそうだということ。つまり、採る時期を過ぎると不味いので自嘲気味です。

「盗なるかな･･･」、
山芋発見。茸狩の予定が芋を掘ることになったというわけです。

「あの人はきのこ･･･」、
大きな耳の人なんですね。
噂話でも何でもよく知っている、情報通ということですね。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

高橋 ＞　次の季語は「鬼灯」です。会長も鬼灯を擬人化した面白い句をお詠みですね。
鬼灯のすでに臨月らしき色　健

それでは、滑稽俳句集に参ります。
鬼灯の口つきを姉の指南かな　一茶
鬼灯をとつてつぶす背中の子　一茶
鬼灯のをかしかりける入歯かな　是哉

会長 ＞　「鬼灯の口つきを･･･」、
これは今でも通用する句ですね。一茶には弟しかいませんからこれは自身のことではありません。こんな姉さんがいたらなあ、という羨望が伝わってきますね。

「鬼灯をとつて･･･」、
子煩悩の一茶は授かった子を、成長する前になくしています。これも願望かも知れません。

「鬼灯のをかし･･･」、
孫に鬼灯を鳴らして見せる。入れ歯がひっかかった、あるいは外れて大笑いという風景ですね。

高橋 ＞　歴史を踏まえた面白いご解説ですね。続けて参ります。次の季語は「蕃椒（ばんしょう）」、とうがらしの事ですね。
気みぢかに秋を見せけり唐からし　蕪村
賭けにして唐辛子食ふ泪かな　几董
人は武士君小粒でも唐辛子　一茶
がむしゃむと唐辛子かむ男哉　露月
諫言は鼻に入みたる蕃椒　紅緑

ぴりぴり辛い句が沢山並びましたが、よろしくお願い致します。

会長 ＞　「気みぢかに秋を･･･」は、
唐辛子が赤色に急変したことを「気みぢか」に「秋を見せてくれた」と、うまく表現しています。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

「賭けにして･･･」、
昔はあらゆるものに賭けをしたものです。娯楽が少なかったからですね。賭けに負けたら、唐辛子を食う。馬鹿馬鹿しいことですが、それも楽しみだったのです。

「人は武士君･･･」、
小柄なお侍を激励しているのです。あるいは武士で無いかもしれませんが、その気概を持てと言っているのですね。

「がむしゃむと･･･」、
これはまた豪快な男ですね。唐辛子を「がむしやむと」噛む。辛いのを我慢しているのですから、それだけで可笑しいですね。

「諫言は鼻に･･･」、
叱責され、ご尤もなご注意に納得。己の不甲斐なさに涙しているのです。鼻にしみる唐辛子みたいだと。

高橋 ＞　やはり、唐辛子の様な、ぴりりとしたご解説、有難うございます。次の季語は「蓮の實飛」です。歳時記には、「蓮のことを古名で『はちす』と呼んだのは、花托が蜂の巣に似ているからで、花後に花托の穴に種が出来て熟していく。晩秋に種は穴から飛び出して水中に沈む」等と、季語を説明していますよ。句に参ります。

蓮の實の蜂にもならず飛びにけり　露通

笑つては飛び怒ては飛び蓮の實なし
子規

蓮の實の不意に飛びたる出来心　碧玲

蓮の實の飛んでもないことなされしよ
紅緑

会長 ＞　「蓮の實の蜂･･･」、
蜂の巣を前提の句ですが、それを承知の上の遊びの句ですね。可笑しいです。

「笑つては飛び･･･」、
「實なし」として「実が飛んで」しまったことを想起しています。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

「蓮の實の不意に･･･」、
不意に飛ぶのを出来心とした擬人化の句。出来心は作者自身でもある。つまり蓮の実になってしまったようです。

「蓮の實の飛んでもない･･･」、
飛んでしまったので、「ない」といことを地口で表現している。遊びの句ですね。

高橋 ＞　飛んでもないご解説、面白いですね。次の季語は、
「椎實」と「團栗」です。
椎の實に雀を嚇す鴉かな　子規
團栗のねんねんころりころりかな　一茶

会長 ＞　「椎の實に･･･」、
雀が椎の実を啄ばんでいるところへ、鴉が来て横取りしています。

「團栗のねんねん･･･」、
団栗が落ちている。団栗は眠っている。その団栗に語りかけています。

高橋 ＞　本日も、古人の気持ちに立ち戻る事が出来る様な面白いご解説、有難うございます。笑って学習させて戴いている内に、残念ですが、お時間が来てしまいました。

最後に会長に、浪曲調の一句をお願いして、本日も締めさせて戴きたいと思います。

会長 ＞　薄･栗･鬼灯で参りましょう。

♪人情のおおおお　薄きは　薄の文字に似て
鬼の点せる提灯のおおおおお
照らしだしたるううううう栗いいの棘えええええ♪

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。